

部会報告

■ 染織部会

総会・研究会

日時 平成三十年十月十五日(月)

場所 厚木グラススタジオ

参加者 総会 十九名

研究会 二十一名

神奈川県厚木にある、厚木グラススタジオの二階をお借りして総会をした後、一階にある工房でガラス工芸の体験をしました。吹きガラスとトンボ玉体験の二チームに分かれ、山口浩二先生(諸工芸



をはじめ、二名ずつついてもらい指導していただきました。

トンボ玉作りでは、細い色ガラス棒をエアーパーナーで溶かし、金棒に巻きつけてた玉にします。色ガラスが溶け、元の色ではなくなり真っ赤でとても神秘的に思えました。形を整えたらパーナーから外し、冷まして行くのですが刻々と色が変わる様を見ながら、どんな仕上がりになるのか楽しみを残し、無事終えることができました。

吹きガラスの人たちはまず形を考え、ワイングラスにするのか、一輪挿しまたは、片口など思いを伝え、高温で溶けたガラスを吹き竿に巻き取ってもらい、息を吹き込んで世界に1つだけのオリジナル作品を作っ

ていました。トンボ玉は二時間、吹きガラスは二日かけて冷まし完成だそうです、皆さんがどんな作品になったかは見られませんが、後日送られてきて満足そうな顔が目にかびます。

その後、記念写真を撮り、近くのバス停から皆さんと一緒にバスに乗り、本厚木駅近くで懇親会を開きさらに親睦を深めました。

実際体験してみても、日本工芸会は七部門からなっており染織以外の人たちと知り合い、つながり、お互い

高め合える場なのだと感じました。なかなか経済的、時間的にも大変ですがそれ以上にメリットがある研究会で有意義な1日でした。

藍田愛郎 記

■ 漆芸部会

研究会

第五十八回東日本伝統工芸展出品者

研究会

日時 平成三十年四月二十五日(水)

場所 ハロー貸会議室

東京八重洲北口

司会進行役 松本達弥氏

鑑審査委員 増村紀一郎先生

鳥毛清先生

松本法子先生

中條伊穂理先生

参加者 会員二十一名 一般六名

平成の年号が最後となるこの年、東日本伝統工芸展も第五十八回を迎えました。恒例ではありますが、漆芸部会では出品されたすべての方を対象とした研究会が行われました。司会進行は松本達弥氏です。

総評として増村紀一郎先生からは、向上心を持つものは公募展に出

品するとしうえで、出品された作品においては意欲を感じるものを評価する。その中で技術、素材、造形の美に長けた作品は賞に値した。逆に技術が満たない作品に関しては票が得られない結果となったと講評されました。(結果表は図録P79を参照)

また、鳥毛清先生、松本法子先生、中条伊穂理先生からは評価の対象として具体的な例があげられ、表の繊細な仕事とは裏腹に内側や底、足など作品を支える仕事に伴っていないことが指摘されました。一つの作品であることの意識を高め、表同様に



仕上げに留意し制作することが必要であるとされました。

次に受賞者紹介として築地久弥氏は、デザインされた造形美に加え、漆の肌、艶の表現に新たな可能性を広げました。また、高橋玲子氏は水平線からのぼる朝日のイメージが技術美と重なる作品でした。両作品とも「用の美」を追求した作品として高い評価が得られ受賞されました。初入選の紹介の後には参加者から質疑応答の時間となりました。

特に乾漆技法に伴う素材に入手困難なものがあるが、どう対処したらよいかという質問に対し、増村先生からは、伝えられている技法の中に多くのヒントはあり、答えは一つで

はないこと、これらを工程の中でどう補うか、工夫によって柔軟に対応するようにご講義いただきました。

私たちは作品とどう向き合い、制作に望むことが必要か、研究会という場を参考にしていただきたいと思います。

豊平江都 記

金工部会

研究会

第五十八回東日本伝統工芸展出品者研究会

日時

平成三十年四月二十五日

場所 東京文化会館 中会議室2

参加者 三十一名

東京芸術大学大学美術館教授黒川廣子氏、北村眞一、井尾建二、奥村公規、家出隆浩の5名の鑑審査委員、司会押山元子で出品者研究会が行われました。

まず、鑑審査委員長の北村より「今

回は例年より出品作品のレベルが高く、金工部会からは3点の受賞がありました」と報告があり、他の鑑審査委員の方々からも「出品作品全体のレベルが高かった」という同様の意見があった一方で、「出品数が少ない」「作品のボリュームが小さい」「作り手の想いが感じられない



作品が多い」といったご意見も聞かれました。

続いて各鑑審査委員より全体的な講評がありました。今回は金具の作品についてのご指摘が多く聞かれました。

「デッサンや原型制作にもっと時間を費やした方が良い」「良い金具の作品を沢山見て、金具独特の表現方法を勉強して欲しい」といった、制作の準備の段階でしっかりと時間をかけるようにとご指導を頂きました。また、技術の面だけでなく、「表現したいという意欲を大事にして欲しい」「作者の想いを作品に込めて欲しい」といったご意見も頂きました。

続いて、各鑑審査委員の気になった作品についての具体的な講評がありました。

出席されていた作者も交えての意見交換も行われ、デザインや技術的な問題点を細やかにご指導頂きました。

今回初入選となった方々への講評の後、受賞者からの挨拶と作品の解説があり研究会終了となりました。

例年の研究会では、作品のデザインや技術的な内容がほとんどです

が、今回の研究会では作品制作への取り組み方や作家として意識等の内容のご意見が多少聞かれました。

先輩の方々のそういった幅広い御意見や考え方も聞く事が出来ると、より意義のある研究会になると感じました。

中村 大朋 記

■ 木竹工部会

研究会・総会

第五十八回東日本伝統工芸展出品者

研究会・総会

日時 平成三十年四月二十六日

午後一時半～四時半

場所 ハロー会議室八重洲北口

参加者 二十六名

日本橋三越本店会場でのギャラ

リートークに引き続き、MOA美術館館長の内田篤呉先生をはじめとして、藤沼昇、田中旭祥、島崎敏宏、

桑山弥宏の鑑審査の諸先生方のご出席を頂き、玉井智昭氏の司会で会が進められた。

先生方のご紹介、出席者の自己紹介の後、受賞者の本間昇氏と江花美

咲氏の紹介があり、続いて鑑審査委員の講評に入った。

先ず、内田先生は、今展の一番際立った特色として、本田昇氏の作品が最高賞に選ばれたことを挙げられた。氏は地場産業として継承されてきた箱根寄木細工を長年に亘り牽引



してきた職人であり、今回の作品もその技術を使っているが、その作品は最早寄木細工ではなく、優れた美術工芸品になっていると言う。また「文化は消えてからでは遅いので、技と道具と材料を継承していく必要がある。」と、その重要性を説かれた。

この内田先生のご発言をきっかけに、各先生方からも「技術と創作」についてのお考えが述べられた。島崎先生は「現在の指物はやや加飾に走っている気がする。もう少し木地本来の良さを生かす仕事を。」と指摘され、藤沼先生は「大事なものは職人の技術プラス自分の表現であり、オリジナリティのあるものを創るのが作家である。」と。田中先生も同様に「基本技術が大事。」また、「フォルムに対する意識が希薄である。」とも。桑山先生からは「拭き漆や生地仕上げをもっと丁寧。」との指摘であった。「地場産業から美術工芸品へ」「職人から作家へ」「職人としての高度な技術と作家としての新たな表現の追求」この両輪が相俟って初めて「現代の美術工芸品」が生まれる、と言うことを再認識させられた研究会となった。

この後、休憩をはさんで総会が開

催され、会計報告並びに事業計画案の発表があり、共に承認を得て散会となった。

藤塚 松星 記

人形部会

第五十八回東日本伝統工芸展

研究会・総会

日時 平成三十年四月二十九日

午後二時～四時半

会場 ハロー貸会議室日本橋室町

参加者 会員 二十三名

一般 一名

総会 年次報告

(事業報告・会計報告・

事業計画・予算案の承認・

庶務事項の報告)

研究会 (支部展出品作の講評)

戸館和子 (多摩美術大学 教授)

岩瀬なほみ氏 井上春子氏

青野洋氏 松崎幸一光氏

第五十八回東日本伝統工芸展の応募

作品についての講評を鑑審査委員の先生方からプロジェクトを資料

として作品一点ずつ丁寧に講評いただいた。何を表現したいのか明確にし、

しっかりと作りこむこと、人体の

フォルムの基本をしっかりと把握しデフォルメすること等の指摘があった。

記

展覧会

第二十九回伝統工芸人形展開催

日時 平成三十年五月二日～七日

会場 日本橋三越本店六階美術画廊

同展出品者研究会

日時 平成三十年五月二日

会場 日本橋三越本店二の間

講師 佐々木正直氏

(群馬県立館林美術館館長)

作家 青江桂子氏 青野洋氏

紺谷力氏 中村信喬氏

参加者 三十六名

各先生から作品について丁寧な講評をいただいた。全体のレベルアップが必要。

作品展示

日本橋三越本店六階美術画廊において支部会員による作品展示を昨年より継続実施。

諸工芸部会

研究会

第五十八回東日本伝統工芸展出品者研究会

研究会

日時 平成三十年四月二十五日(水)

十三時半～十五時二十分

場所 東京文化会館4階中会議室1

参加者 会員二十九名 一般十名

第五十八回東日本伝統工芸展出品者研究会が、四月二十五日(水)東京文化会館四階中会議室において会

員二十九名、一般十名、学識者一名、計四十名の参加を得て行われた。講

師として鑑審査にあたった竹内順一、氣賀澤雅人、高橋通子、勝文彦、

雨宮彌太郎の各氏が出品作品の講評を行った。氣賀澤先生より鑑審査の

結果報告が行われた後、はじめに竹内先生より伝統工芸であっても現代

の造形であることを強く意識することの必要性が説かれた。今までの伝

統工芸のあり方をふまえながら、工芸がどこに向かっているのかを各々

自分なりに考えて作品を構想すべきであると指摘された。その後、画像

をもとに各先生方よりそれぞれの専門的な視点から各作品についての講

評が行われた。蓋やつまみ部分など

全体の中でのバランスを配慮する

事。小さな要素でも作品全体を台

しにしてしまう場合がある事が伝え

られた。また技術的には素晴らしく

ても、その技術をどう使うか、さら

に進んだデザインにするために、か

たち、紋様等、整理してよく検討す

る必要がある事が説かれた。選外作

品も含め質問も活発となり充実した

研究会となった。

雨宮 彌太郎 記



地区研究会 報 告

北海道研究会

平成三十年度定例総会

日時 平成三十年四月七日(土)

会場 札幌かでる2・7 九階

九三〇研修室

議題

(一) 平成二十九年度経過報告

(二) 平成二十九年度会計決算・

監査報告

(三) 平成三十年度事業計画・予

算案審議

・『第六回伝統工芸北海道展』開催
の実行委員会と活動について

・北海道地区研究会の行事について

・伝統工芸(北海道研究会)の普及

啓蒙と人材発掘について

対外的に活動していることをア

ピールする。

研究会に対して思うところを後続
に伝えていく。

(四) 役員改選

現行 会計 西村和(事務局)より

改選後 会計 穴戸孝子(事務局)

◇「第六回伝統工芸北海道展」開催
について

会期・会場

平成三十年十一月十三日(火)

十九日(月)

札幌三越

9階美術ギャラリー(A+B)室

◇展示方法 作家別展示

◇企画 コラボ作品の継続

◇賛助出品 継続

◇「第六回伝統工芸北海道展」の出

品作品について

伝統工芸に対する見方を変えるよう

なものにする。

以上、今年度の「第六回伝統工芸北

海道展」開催に向けて準備を進めて

います。

降旗ゆみ 記

東北研究会

研究会

日時 平成三十年一月二十三日(火)

午後一時〜二時三十分

開場 仙台小田急ビル

四階第二会議室

講師 神谷紀雄氏

(陶芸家・伝統工芸展鑑審査

員・千葉県美術会理事長)

テーマ 「伝統工芸と私の仕事」

「きれいなものを目指すのではない。

真に美しいと思われるものを目指す」

参加者 会員約十三名

司会 浅野治志

凛、として身の引き締まるような

寒空の下。今年も東北研究会は、伝

統工芸展鑑審査員である神谷紀雄先

生をお迎えし、御講演をいただく運

びとなりました。研究会の演題は「伝

統工芸と私の仕事」です。

長年の修練に裏付けられた、確か

な轆轤技術。豪快、且つ軽妙な鉄絵

の筆致。自然の草花をモチーフにし

た鉄絵・銅彩で知られる神谷先生は、

その穏やかなお人柄とユーモア溢れ

る人間性で、作品だけでなく多くの

ファンがいるとお聞きます。「きれ

いなものを目指すのではなく、真に

美しいと思われる作品作りを目指さ

なければならぬ。そのためには、

絶えず新しいものを見いだす努力を

続けなければならない。そのことが

本当の伝統を造り出す。伝統とは単

に技術を伝承するのではなく、自分

の技術/人間力を磨くこと、その





ために絶えず自問自答してほしい。」

およそ半世紀以上にも及ぶ先生の経験、だからこそ生まれる言葉、重みのある言葉の一つ一つが、私達会員の心に響き渡りました。

こうした先生からの助言は、私たち作家の創作活動に対しての大きなヒントになり、今後の制作活動につながるものと思います。伝統工芸の中でも、千葉県勢の多くの陶芸作家が、際立って活躍中であることは多

くの方がご周知のところですが。そのエネルギーの源となるのは間違いなく、陶芸作家『神谷紀雄』の存在の力と感じました。

寒い日にも関わらず、会員中心に十三名の参加者があり、とても充実した研究会になりました。最後に神谷先生、研究会に関係された方々に厚くお礼申し上げます。

浅野 治志 記

展覧会

日本工芸会 東北会員による

第七回創るよろこび使うよろこび展

日時 二〇一八年一月二十四日(水)

～三十日(火)

会場 仙台三越本館七階アートギャラリー

本年は例年にならない大雪に見舞われ、冷え込みが厳しく感じられた仙台。今年度も(公社)日本工芸会の東北会員によるグループ展が仙台三越にて開催された。

会員展実行委員の指示のもと格調高い力作から手に取りやすい小作品まで会場にバランスよく陳列された。

七日間の会期中は作者が日替わりで在廊し、技法の解説シートと共に

工芸や作品の魅力を丁寧に伝えていった。

また昨年に引き続き、テーマを設けた特設展示も行った。今年は「動物」をテーマに愛らしく心暖まる作品の数々が、会場を訪れた人々の目と心を楽しませた。

作者が直接使い手の声に耳を傾けることや魅力的な展示空間を作り上げる工夫の大切さを、改めて実感する展示会となった。

矢萩 誉大 記



総会

平成三十年度東北研究会定例総会



日時 平成三十年六月六日(水)

午後一時～二時

場所 仙台小田急ビル七階

第三会議室

出席者 十一名

茨城研究会

展覧会

工芸秀作展―日本工芸会東日本茨城
研究会員による―

会期 平成二十九年十月二十四日

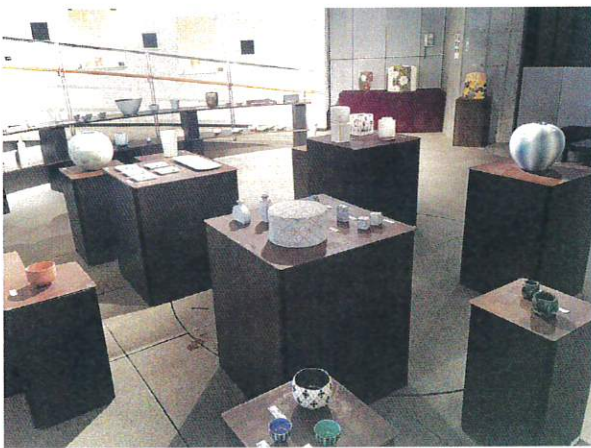
(火)〜十一月五日(日)

会場 笠間工芸の丘

クラフトギャラリーII

笠間工芸の丘にて「工芸秀作展」
を開催いたしました。

福野幹事長・茨城研究会役員のも
と準備が進められ出品各位のご協力
により開催されました。



例年、工芸の丘では小品を中心と
した展覧会としております。

茶器、酒器、食器などの作品を通
じて、会期中ご来場いただいた多く
の方々に茨城県の伝統工芸の現在に
理解を深めていただくことができた
のではないかと思います。

今後とも、各々が日本伝統工芸展、
東日本伝統工芸展に向けた日頃の研
鑽を小品に還元していくことで、よ
り良い展覧会になっていくのではな
いかと思います。

講演会

神農巖先生講演会

日時 平成三十年五月三十一日(木)

会場 茨城県立笠間陶芸高等学校

研修室

講師 神農巖氏

出席者 三十九名

陶芸家で滋賀県指定無形文化財保
持者 日本工芸会理事の神農巖先生
にご講演いただきました。

講演の前半は、大学の陶芸クラブ
で陶芸と出会った話から始まりまし
た。

京都の国立博物館での安宅コレク
ション東洋陶磁展で青磁の作品に魂

を揺さぶられ、陶芸を天職にすると
覚悟をしたこと。

東洋陶磁の青磁釉の再現を研究し
ているうちに自分の青磁、雨過天青
の失透の冴えた青に近づける様に制
作していること。

修行時代に口の欠けてしまった祥
瑞の生地を修正する作業をしていた
時に装飾表現としてこの技術が使え
るのではないかと考え、それが現在の
堆磁技法に繋がったこと。

神農先生の陶芸との出会いやどの



様に現在の作風に至ったのかなど、
たくさんのお話しをいただきました。

後半は、神農先生の作品写真をス
ライドレクチャーにて一点一点の制
作意図などのお話しをしていただきま
した。

会場が茨城県立笠間陶芸大学校
だったこともあり、会員以外にも多
くの学生や一般の参加者もあり充実
した講演会となりました。

最後に、神農巖先生、講演会の企
画・協力していただきました方々に
厚くお礼申し上げます。

根本峻吾 記

群馬研究会

総会・研究会

日時 平成三十年十月二十二日(月)

会場 須田賢司先生宅・木工塾ギヤ

ラリー 清雅―SEIGAI―

出席者 総会十五名・研究会十六名

議題 平成二十九年度事業報告

平成二十九年度会計報告

新入会員紹介

岩崎久美子さん(人形)

「第四回伝統工芸群馬展」に
ついて

総会は、例年五月に開催していたのですが、会員のいろいろな事情が重なり、ずれ込んでしまいました。新体制で一丸となつて盛り上げていきたいと思っています。



研究会は、爽やかな秋晴れの中、須田賢司先生（木工・重要無形文化財保持者）の木工塾ギャラリー（清雅にて、作品解説、仕事場拝見をさせていただきます）と富岡製糸場（世界遺産）は少し行くと富岡製糸場（世界遺産）がある、甘楽町小幡にあり、街並みを眺められる小高いところで心地良い風が吹いていました。普段は、土・日曜限定で一般公開されているそうです。



先生には、みんなの質問に一つ一つ丁寧に答えていただき、仕事に対する情熱を感じることができ、今後の作品に対する思いを改める良い機会になりました。また、勉強会が開かれていたようで、次の世代の人たちに技術的なことだけでなく、いろいろな意味で伝えていく姿勢には、とても感銘を受けました。凄く有意義な時間をありがとうございました。

藍田 愛郎 記

■ 千葉研究会

総会

日時 平成三十年三月二十七日（火）

場所 神谷紀雄先生宅

出席者 二十名（委任状二十一名）

議題 第十九回伝統工芸千葉展について

二十回記念展について

研究会の開催について

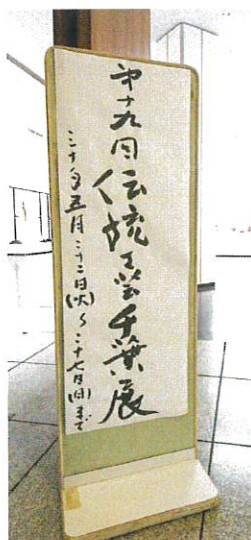
その他

展覧会

第十九回伝統工芸千葉展

日時 平成三十年五月二十二日（火）～二十七日（日）

会場 千葉県立美術館



出席者 会員 三十四名
主催 日本工芸会東日本支部千葉研究会
後援 千葉県・千葉県教育委員会・朝日新聞社千葉総局・NHK千葉放送局
第十九回伝統工芸千葉展が昨年に引き続き、千葉県立美術館を会場に六日間に亘って開催いたしました。美術館を会場としては二度目となり前日の搬入及び陳列作業もだいぶ慣れた様子ではありましたが、細々とした備品については、現場対応を迫られた場面もあり課題となる点も少なからずあったように思います。

来場者に関しては新聞イベント欄への掲載もあり、昨年に増して大勢の方々にもいらして頂き、少しずつ認知度も高まって来たように思います。今回は二十回記念展ということで、会期中の企画も含め、一層の盛り上がりをご期待して幕を閉じました。

松原 伸生 記



■ 神奈川研究会

展覧会

第二十五回 伝統工芸神奈川会展

日時 平成二十九年十二月二十二日

～二十五日

会場 鎌倉芸術館 ギャラリー2

出品者数 三十四名

出品点数 五十点

来場者数 二八五名

受賞者

神奈川研究会会長賞

友禅訪問着「涼風」

川島 和美（染織）



奨励賞

炭化壺

大内 明雄（陶芸）

奨励賞

乾漆筒切り紙「蘭」

岡村 康子（漆芸）

特別展示

作家の道具に見る

「人形」技法と歴史」

解説 角田 智子（人形）



第二十六回伝統工芸神奈川会展

日時 平成三十年八月三十一日～

九月三日

会場 鎌倉芸術館 ギャラリー2

出品者数 三十三名

出品点数 四十八点

来場者数 三八八名
 受賞者
 神奈川研究会会長賞
 おぼろ型染着物「天滴綺羅」
 篠原 優子（染織）
 奨励賞
 「砂丘残照」
 小谷 ハルノ（人形）



奨励賞

切子硝子「四角」

釣 敬子(諸工芸)

特別展示

作家の道具に見る

「曲輪―技法と歴史」

解説 高橋玲子(漆芸)

総会

会期 平成三十年九月三日(月)

十三時～十四時

場所 鎌倉芸術館 第一会議室



研究会

講演会

洋食器のデザイン

会期 平成三十年十月十五日(月)

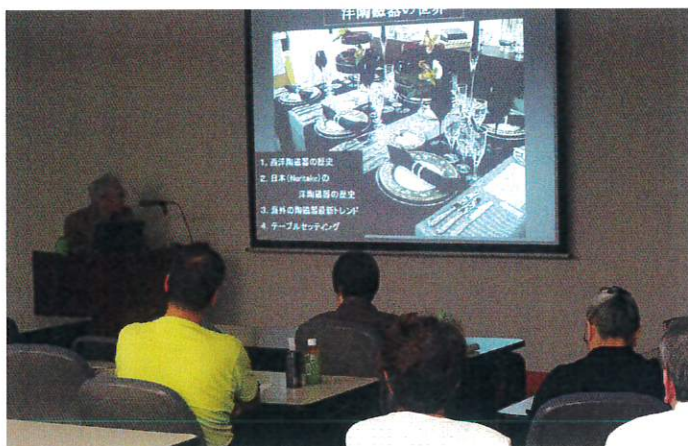
場所 かながわ労働プラザ

第三会議室

講師 齋藤秀雄

(株式会社ノリタケの森 講師)

日本陶器(現ノリタケカンパニーリミテド)で長年デザイナーとして活躍され、現在陶磁器絵付けの講師をされておられる齋藤氏に洋食



器の歴史、デザインの変遷を講演していただきました。

輸出産業として始まった洋食器産業が窯業として発展し生活に関わっていく話を大変興味深く伺いました。

また、テーブルコーディネイトと地域の伝統工芸とのコラボレーション作品について、これからの伝統工芸とのかかわりの可能性を解説して頂きました。

後閑博明 記

■新潟研究会

展覧会

第十四回新潟県伝統工芸作家展

(会員展)

会期 平成二十九年十一月十八日

(土)～十二月二十四日(日)

会場 雪梁舎美術館(常設館)

出品者 三十三名

出品数 三十三点

第十二回新潟県伝統工芸展(公募展)

会期 平成二十九年十一月十八日

(土)～十二月二十四日(日)

会場 雪梁舎美術館(新制館)

出品者 五十三名

出品数 五十六点

受賞者

雪梁舎賞 佐々木玲子(諸工芸)

正会員優賞 大蔵豊彦(木竹工)

奨励賞 宝田純佳(金工)

西橋はる美(染織)

長谷川克義(金工)

皆川 進(木竹工)

第十二回新潟県伝統工芸展を雪梁舎美術館(新潟市西区)の全面的な協力のもとに開催いたしました。入場者数 八百七十四名

研究会

第十二回新潟県伝統工芸展(公募展)

出品者研究会

日時 平成二十九年十二月二十五日

(月) 午後二時～四時

会場 雪梁舎美術館(喫茶室)

テーマ 出品作品について

参加者 二十二名(内、会員十九名)

悪天候のため佐渡航路の欠航などもあり欠席が増えました。最初に雪梁舎美術館の岡田事務局長より、入場者数などの実績の報告がありまし

た。審査員からは、全体に作品が小さい。正会員の力作が少ないと報告がありました。玉川宣夫副会長からは、正会員も含め出品数が少ないと指摘されました。

樋口隆司 記



■ 長野研究会

総会

長野研究会総会

日時 二〇一八年四月三日(火)

場所 松本市 県の森文化会館

長野研究会総会を四月三日に行い
 新年度へ向けての活動などについて
 話し合いました。

議題 二〇一七年度 事業報告・会計報告

監査報告

役員改選

二〇一八年度 事業計画・予算計画

その他

第十六回伝統工芸長野展について

井上展について ほか

新年度役員

会長

柳澤保範

実行委員長・副会長

荒井慶子

事務局長

篠田明子

会計

平林義教

監事

大島和子

監事

中山裕子

展覧会

長野でつなげる伝統工芸

長野茨城交流展

第十六回伝統工芸長野展

会期 二〇一八年九月二十五日(火)

～九月三十日(日)

会場 ギャラリー82(長野市)

出品 長野 十八名

群馬 十二名

本展は長野市ギャラリー八十二で
 の開催で交流展も三回目となりま
 す。

実行委員長・会員のもと準備が進
 められ長野研究会、茨城研究会出品
 各位のご協力により開催されまし
 た。

会の活動の活性化、会員の交流に
 より工芸への考え、取り組み方など
 作者作品への理解とともに制作への



思いが深まれば、との考えから、ご
 縁のありました松井康陽氏に相談を
 申し上げましたところ茨城研究会福
 野会長・根本事務局長の一方ならぬ
 ご尽力をいただき茨城研究会皆様の
 ご協力、ご出品を得て、交流展とし
 て開催の運びとなりました。

飾り付けには茨城研究会からも駆
 けつけて下さり、挨拶もそこそこに
 取り掛かりました。



会場設定、位置決め、展示、調整等と和気あいあいの裡に無事飾り付けができました。

会場には緊張感があふれ茨城研究会の皆さんの作品には伝統を受け継ぐ町の切磋琢磨が思われ、その個性を生かす工夫と際立つ仕事ぶりにさすがと感動するのでした。

会期中、天候には恵まれず最終日、台風の影響も受けました。時間を切り上げ撤収をしましたが、おかげさまで多くのご場者を得て好評、盛会のうちに終わることができました。

研究会

竹内順一先生勉強会

日時 二〇一八年九月二十四日(月)

午後一時三十分より

会場 展覧会特設会場

先生にご覧いただいた後、会場を設定し勉強会に入りました。茨城研究会よりも引き続き参加していただきました。出品出席会員作品一点を示し作者の考えなどを述べ、竹内先生に講評をいただきました。先生は丁寧な作者に寄り添い意図、技法などお聞きくださり、その上で作品へのご批評を下さいました。陶芸では主に口の作り、形と絵柄の問題。人

形では作品の大きさ、作品と台の関係などが取り上げられました。また作品に審査という競争を勝ち抜く思い、作品の強さが欲しい、そして作者の意思を表す題名の付け方などなど・

先生からこの会はこういう形でもやっていますと説明していただき、茨城研究会の方々もややとまどいながらも作品の説明、制作過程など話してください、皆様の作品への取り組みの深さに感動しました。そして長野研究会会員も改めて勉強会の意義、ありがたさに気づかされ、それを噛みしめました。

そんな余韻を残しつつ会場を移して、竹内先生を囲み茨城研究会の皆様とともに懇親会を行いました。早朝よりの展示、勉強会の疲れもどこへやら、和やかに楽しく過ごすことができました。茨城研究会の福野会長、松井さん、山路さん皆様の、伝統を受け継ぎ次代に伝えるということ、竹内先生ご在任時代の旧知の方々の懐かしいお話、また新しい作品への取り組みなどへの思いのこもったお話など、盛り上がりしました。これを機に交流が進みわが会員にも元気が出て活動が活発になればと

願います。

終わりになりますが毎回、作者に寄り添い熱心で懇切なご指導をくださる竹内先生、そして交流展開催を快く受けいただき、展示、勉強会、懇親会、交流と親睦を深めていただきました茨城研究会の皆様にあらためて厚く御礼申し上げます。

柳澤保範 記

